

奈良絵本『宇治拾遺虎物語』における改作について

山口眞琴

はじめに

『宇治拾遺物語』の虎関係説話（三九「虎ノ鰐取タル事」、一五五「宗行郎等射虎事」、一五六「遣唐使子、被食虎事」）を収めた絵巻に関しては、前稿¹⁾の末尾注記に少しく紹介したところだが、小稿では改めてそれを取り上げ、主に詞書本文についての注釈的分析や『宇治拾遺物語』本文との比較検討を通して、その改変・加筆等による改作の実態を明らかにしてみたい。

抑も、当該絵巻は二〇一〇年六月時点の森井書店ウェブ目録において、「奈良絵本 宇治拾遺虎物語」と題して、次のように紹介されているものである。²⁾（〳は改行。以下同）。

近世前期（寛文・延宝頃）写。／竪三十三×横約一〇九〇センチ、一卷。絵・合計五図、金箔散金霞入料紙、金銀泥極彩色画。

本文料紙には金泥で草木が描かれている。全体に折れ・スレがあるが、状態は比較的良好。／虎にまつわる物語を集めた絵巻。

このいわゆる「解題」には、さらに構成・内容等に関する具体的な説明がなされるなど、既に専門的な知見・判断が加えられている。

それは研究の嚆矢として貴重なものであり、小稿もそこでの指摘等を起点にして議論を進めていく。なお、現在、当該絵巻はどこに所

在しているか不明であり、稿者も直接は未見だが、右のウェブ上に公開された全体画像のほか、石川透氏より写真版画像を見せて頂くこともできたので、今回はそれらに拠って考察を行っていく。また、外題・内題等のない当該絵巻の呼称については、「解題」を尊重して『宇治拾遺虎物語』と認定しつつ、便宜それに基づく『虎物語』という略称を用いたい。その詞書本文（漢字交じり平仮名文）の引用に際しては、適宜、仮名に漢字を当て（元の仮名は振り仮名で示す）、濁点・句読点・会話のカギ括弧などを施すことにする。

一方、『宇治拾遺物語』については、古本系・小世継混入本系・古活字本系・板本系などに大別されるが、それら諸本と対比するに、右の『虎物語』がどの系統本文に拠ったのかは判然としない。³⁾ よって、当面、小稿では『虎物語』の推定制作時期の直前に板行され、以降、流布本となった万治二年（一六五九）絵入り板本を用いることにしたい。本文は国文学研究資料館初雁文庫蔵本に拠り、引用に際しては、同板本を底本にする日本古典全書を参照し、『虎物語』と同様の仕方では表記等を行う（板本の振り仮名は*を附して区別）。

なお、万治二年板本の虎関係説話は巻第三七、巻第十二九、同20だが、説話の番号・標題については、従来通り古本系の陽明文庫蔵本を底本とする新日本古典文学大系に拠る。

一、全体構成と冒頭段「龍虎の争い」

『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』とも略称）を題材とした近世の絵巻や絵入り本については、小峯和明氏の論考に詳しく、ここでは計九点の諸本が確認された上で、陽明文庫本・チェスタービーティ図書館本・国会図書館本など、「複数の説話を描いたテキスト」を中心に考察がなされている。但し、その中に「虎物語」に相当するものはない。従って、新たな絵巻本と言うべき「虎物語」だが、それが他の諸本に比べて独特なのは、やはり「虎」という特定の題材によって統一的に構成されている点にある。そのことは、諸本中、絵入り写本の一つとして知られる吉田幸一蔵「るし長者」（一冊。近世初期。濃彩）が、天竺の話題で共通する八五「留志長者事」と九二「五色鹿事」を折衷することで、一篇の物語に仕立てられているのに、若干通じるものがある。また、一話のみの収録だが、出光美術館蔵「宇治拾遺物語絵巻」（絵巻一軸。住吉具慶画。濃彩）は一八九「門部府生、海賊射返事」を、国会図書館蔵「今昔物語絵詞」（絵巻一軸。淡彩）は一一九「吾婦人止生賢事」を絵巻化した作例であり、それぞれ弓箭武芸譚・動物退治譚という点で「虎物語」と共通する。しかし、それらの絵巻には「虎物語」のように「宇治拾遺」の原話を積極的に改変することがない。その点では、これも絵入り写本の広島大学蔵「雀の夕顔」（二冊。寛文頃。濃彩）が、四八「雀報恩事」に拠りながら、末尾を中心に加筆を旨とする改変がなされて成るのは、似通うようだ。もとより個々内実は異なるものの、『虎物語』の改変というのは、いわゆる奈良絵本の「改作」

に近いと思われる。上掲の「解題」における「奈良絵本」としての認定、奈良絵本・絵巻の「最盛期」に当たる「近世前期（寛文・延宝頃）写」という制作時期の推定とも関わって、ひとまずそのように見通しておきたい。

では、『虎物語』でとりわけ重要な意味をもつ冒頭第一段の詞書を見てみよう。「解題」には、先掲の書誌に続けて、全体の構成をはじめ、『宇治拾遺』などに依拠しての成立や具体的な改変等に関して、次のような説明が見られる。

まず初めに「竜虎の争い」が描かれ、ついで「虎の罅取りたる事」、「遣唐使の子虎に食わるる事」、「うちひさ虎を射る事」の順で語られている。／初めの二つが猛虎の恐ろしさを伝えていふのに対し、後の二つの説話は、虎と戦う日本人を描くことで、日本人の勇ましき、日本人の戦への姿勢を伝えている。

これらの説話は「宇治拾遺物語」などにおさめられており、宇治拾遺物語より説話を抜粋・圧縮して編集し、成立したものと考えられる。なお、「うちひさ虎を射る事」は、宇治拾遺では主人公を「宗行の郎党」としているが、本資料では、「ながとのくにのうちひさ」としている。

この前半には、第一段の「龍虎の争い」に関する文章を第一話と見なし、それに「宇治拾遺物語」の虎関係説話を加えた計四話が、主題的に前後二話ずつ配されたとする捉え方が示される。これに対して、第一段をあくまで序章的なものと見て、実質は三話構成と考えることも無理ではないが、いずれにしろ、そうした主題的な統一性において、『虎物語』の新たなテキストとしての独立性が際立つ

ていることは間違いない。

異国に猛虎として猛きものありけり。千里の野辺にすむといへり。又は竹林の巖洞にすんで、龍とつねなくた、かひをなすとかや。これを龍虎の争ひといふなり。龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風生ずる。鳴神・稲妻、天地を響かし、光の中に龍あらはれて、虎をつかんであがらんとす。虎は又巖洞に寄りかゝつて、悪風を吹きかけ、虎乱の勢ひを出して、龍を嘯まむとうかゝふ程に、飛龍の力もかなはずして、雲のうちにぞ入にける。龍は通力自在のものなれども、虎に遭ふては怯めり。その他のけだもの、これに遭ふて害を免るゝ事なし。

右が第一段詞書の全文である（以下、傍線・傍点等は稿者）。これを第一話と見なす「解題」には、次のような説明がなされる。

①「竜虎の戦い」はその起源が淮南子にもとめられる、龍と虎の争うことを描いた説話。この中で、稲妻とともに襲いかかる竜と、対峙する虎の絵が挿入される。

このうち、起源を『淮南子』に求めるといふのは、その卷三「天文訓」に、万物の働きが本末相応する例として表現された「虎嘯いて谷風至り、龍挙りて景雲属まり」を、前掲の傍線部「龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風生ずる」の原拠に目するからだろう。あるいは、『文選』卷第十五所収の「帰田賦一首」（張衡）にある「龍のごとく方澤に吟じ、虎のごとく山丘に嘯く。」（全釈漢文大系・訓読文）などの詩文の影響も考えられるが、全体的には、観世小次郎信光作とされる謡曲『龍虎』に依拠した可能性が高い。

近松門左衛門作の浄瑠璃『国性爺合戦』（二七二五年初演）の「和

藤内の虎退治」の典拠になったことで知られる『龍虎』は、仏跡を尋ねて博多から入唐した僧が、竹林の気色を契機に、樵翁から「龍虎の争い」のことを聞き及び、やがて雲を起す龍と風を生む虎との激戦を目の当たりにするというもの。その詞章のうち「龍吟すれば雲起り。虎嘯けば風生ずと。」（謡曲大観）という表現が、件の傍線部と完全に一致するのをはじめ、「あの竹林の巖洞は虎の栖て候を。向ひに見えたる高山より。常々雲の掩ひつつ。龍虎の戦ひあるものを」、「あれあれ嶺より雲起り。俄かに降りくる雨の音。鳴神稲妻天地に耀く光のうちに。現れ出づる。金龍の勢ひ」、「竹林の巖洞に籠れる虎の。現れ出れば岩屋の内より悪風を吹き出だし」、「金龍雲よりおり下つて。悪虎を取らんと飛んでかかり。飛龍の戦ひ。隙もなし」、「もとより虎乱の勢ひ、猛く。左も右も。剣の如くに竹枝を折つて。金龍にかゝれば」の傍点部を主とした表現が、『虎物語』のそれと合致する。直接の典拠と見てよからうが、重要なのは、「龍虎」の「金龍雲居に遙かに上れば。悪虎は勢ひ巖に上り。遙かに見送り無念の勢ひあたりを払ひ。又竹林に飛び帰り。又竹林に。飛び帰つて。そのまま巖洞に。入りにけり」という結尾に対して、『虎物語』が「飛龍の力もかなはずして、雲のうちにぞ入にける。龍は通力自在のものなれども、虎に遭ふては怯めり。その他のけだもの、これに遭ふて害を免るゝ事なし。」と、むしろ龍が怯む程の虎の猛威を強調することである。この「龍虎の争い」の猛虎譚への変奏は、次の「宇治拾遺」三九に取材した虎と鱉の格闘説話への連繫を意識したものと解される。『龍虎』を大幅に簡約して既に説話的体裁にはないものの、『虎物語』の冒頭段は、全巻の序章と言う

よりも、次話と対をなす第一話と見る方が確かに自然であろう。以下、小稿も「解題」の四話構成説に従うこととする。

なお、先の「解題」に指摘される通り、右の詞書のあとに龍虎対峙の絵（第一図）が描かれる。絵は全部で五図あり、第二図は「宇治拾遺」三九に基づく「虎物語」第二話の途中に挿入され、残る三図は、「宇治拾遺」一五五に基づく「虎物語」第四話の途中に第三図・第四図がそれぞれ挿入され、その最後尾に第五図が置かれる。すなわち「宇治拾遺」一五六に基づく第三話についての絵は存在しない。陽明文庫蔵「宇治拾遺物語絵巻」などが一話に必ず一つ以上の絵を対応的に配するという原則的でありようと比べても、「虎物語」という絵巻本は、いわゆる「説話絵巻」とは異質であることが知られる。また、「宇治拾遺」各話の「これも今は昔」「今は昔」の冒頭句をすべて削除することからも、「虎物語」とは、虎にまつわる文章・話譚を順次ならかに繋げることで、むしろ一篇の絵入り物語をめざしたものと見るべきだろう。

二、第二話／猛虎に怯える明州商人

まさしく「虎物語」の名にふさわしいその結構は、第二段の詞書が、ただちに第二話を語るのではなく、次のような文章をもって始まるどころにも窺われる。

眼まなこに百歩ひゃくほの勢いきほひありて、夜よるものを見みる事こと、明あきらかなり。もし狩人かりどあつて虎とらを射殺いころす時は、左ひだりの眼まなこの光ひかりは天あまに昇のぼりて星ほしとなり、右みぎの眼まなこの光ひかりは地ちに落おちて石いしとなる。かくの如ごとく猛まげく恐おそろしきも

のなれば、偶たまさかにも虎とらに遭あへる人ひと、命いのち生なきたる例たとなし。

この「虎の眼光」に関する故実伝承の如きが、直接何に拠るのか定かではないが、管見では、室町中期の国語辞書『下学集』『節用集』などの「虎」語注記に、類似の文章を見出すことができる。例えば、『下学集』天文二十三年本に「眼まなこ有ある百歩ひゃくほ之威い」。又呼よび曰いわく「於菟うと。夜よる視みれど、一目ひとみ放はなつて光ひかり一目ひとみ看みる物もの。猊人かみ射やれ之の、光ひかり墜おち於お地ち也なり」。成なり白石しろいし」とあるのがそれで、その淵源は、中国唐代の本草書で七三九年に成る陳藏器撰「本草拾遺」の「虎骨」に関する所説にあるようだ。そこには「凡虎視以睛。一目放光。一目看物。猊人候而射之。弩箭纆及。目光随墮地。得之者如白石様是也。」とあり、これを、宋代の「經史証類備急本草」「經史証類大觀本草」等も「今按陳藏器本草云」として引用する。但し、それらには「虎物語」の「眼まなこに百歩ひゃくほの勢いきほひありて」や「左ひだりの眼まなこの光ひかりは天あまに昇のぼりて星ほしとなり」に当たる表現がない。その点では、前者に相当する「眼まなこ有ある百歩之威い」を同じく冒頭にもつ『下学集』などの方が近い関係にあるようだ。なお典拠と確定するには至らない。さらなる検索に努めたい。

さような「虎の眼光」の故実伝承は、「かくの如ごとく猛まげく恐おそろしきものなれば、偶たまさかにも虎とらに遭あへる人ひと、命いのち生なきたる例たとなし。」と結ばれる通り、第一段と同じく虎の猛威を強調したものにほかならない。それが章段を改めて配されるのは、このあと語られる第二話の導入でもあるからだろう。つまり、偶然にも虎に遭つた人間は命のあつた例がない、との言葉は、自分たちを襲つた虎が、その直後に罅ひまと繰り広げた壮絶な格闘を目の当たりにした商人たちの生きた心がしがなかつた、という恐怖体験に差し向けられたようだ。第二話

の末尾、虎が仕留めた鰐を肩にかついで三本の足で岩を駈け登った
場面のとに、そのことを裏づけるような『宇治拾遺』三九との本
文異同が認められる。

……これを見てふ船中の人ぐは、生きたる心地はなかりけ
り。「もしこれが船に飛び入りたりせば、命全き人あらんや。

たとひ劍・太刀・刀を以て立て合ふとも、さしもかばかり勢ひ
強からんものに向かつては、何のせんかあるべき。ゆゑ、し的事
や」とて、船を漕ぎてぞ帰りける。

『宇治拾遺』では、一つ目の傍線部を「なからは死入りぬ」とし、
二つ目の傍線部は、「舟に飛かりたらましかば、いみじき劍・刀
を抜きてあふとも、かばかり力強く速からんには、何わざをすべき」
という文脈に元來存在しない。そこに明らかな改変と加筆は、と
もに先引末尾の「偶さかにも虎に遭へる人、命生きたる例なし。」に
呼応させたものと見てよいだろう。

『虎物語』第二話においても一つ注目すべきは、虎と鰐の格闘
を目撃した人々の具体を書き替えている点である。第二話は次のよ
うに始まる。

唐、明州の津に商人あり。慶州といふ所に商ひに至るとて、
船に乗りて行きけるが、海端には山のありける。その汀に船を
漕ぎ寄せて着く。船子を一人、船より下ろして、山の麓にある
水をぞ汲ませける。……

『宇治拾遺』三九では「筑紫の人、商ひしに新羅に渡りけるが」
とあるのに対して、第二話は、唐の「明州の津」から朝鮮の「慶
州」に赴いた商人たちが虎に遭遇する設定になっている。とくに

「筑紫（今昔物語集）卷二十九31の同話は「鎮西」の商人を「明
州」の商人に改めるのは、何より後半の二話への連関を配慮したか
らであろう。先に言えば、第三話は「唐」での日本の「遣唐使」
による虎退治、第四話は「朝鮮国」に逃亡した日本の「兵」によ
る「ねき」という所での虎退治を物語る。それらの前に置かれる第
二話の目撃者を明州商人に変えることで、「龍虎の争い」のメッカ
である中国に朝鮮の虎の猛威を実感させ、その上で第三話の遣唐使
の虎退治はむろんのこと、第四話の朝鮮での虎退治に誇示される「日
本的武勇」をも、中国に認めさせるかたちをとったのではないか。

その企図は、前掲の第二話末尾のあとに続く次の文章に顕現する。
しかるに、日本の武士のいかめしき体を見るに、猛き虎といふ
とも、さらに恐る、気色なし。いづれの帝の御時にや、唐へ
勅使を立られけり。……

ついでに第三話の冒頭文も引用したが、その前に叙される右の一
文は、虎に遭った人間は命のあった例がないことを喚起的に語った
第二話を承けつつ、その例外として「日本の武士」の虎をも恐れぬ
剛胆に言及することで、後半二話への導人的役割も果たす。すなわ
ち、猛虎さえ恐れぬ日本武士の敬めしさが、後半二話で実証される
のである。そのような展開を、『虎物語』は中国の人々を軸にして
改作的に行つたと言える。裏返せば、それは猛虎に怯える存在から
日本人を外すことであつた。『虎物語』で猛虎に怯えるのは中国と
朝鮮の人々、それに対して、第三話の虎に食われた遣唐使の子を除
けば、日本人は専ら猛虎を退治する存在として語られる。その東ア
ジア三国における日本優位の処し方からすれば、仏跡を尋ねて博

多から入唐した僧が、樵翁から「龍虎の争い」のことを聞き及び、やがてそれを目の当たりにする」という謡曲「龍虎」の説話的な具体が、第一話に語られない必然性も了解することができる。

『虎物語』第一話は「異国に猛虎とて猛きものありけり。」と始まっていた。「異国」は、第三話にも遣唐使に関わる「異国の地に着きて」「名を異国に施しける」という用例があつて、直接は唐・中国を指すようである。そこに第二話と第四話の猛虎の舞台としての朝鮮を含めても支障ないだろうが、それらをあえて「異国」とするところに、虎と虎退治をめぐる自国の単独優位を示すような対外意識が垣間見える。それと関連して、ここで「解題」の第二話についての説明を見ておこう。

②「虎の罾取りたる事」は、海に落ちた虎がワニ（サメの事か）に腕を噛み切られてしまったが、血の滴るその腕を海に浸してワニをおびき寄せ、近づいてきたワニを陸の上へ投げ上げ、殺してしまふ話。ワニを投げ上げた虎の絵が挿入されている。

右の末尾に、第二話に関する第二図が「ワニを投げ上げた虎の絵」として紹介されるが、さらに絵の左方には、その光景を慌てて沖に漕ぎ出した船の中から不安な面持ちで眺める人々の様子が描かれる。その頭髮や衣裳は、第四話に関する第三図・第五図の虎害に苦しんでいた朝鮮国の人々とほぼ同じように見える。少なくとも両者を区別しないその描き方は、日本以外の中国・朝鮮を「異国」と括ってしまう見方に通じるものがある。

そうした第二話の改作で要となつた「明州の津」から「慶州」に至る中国商船に関する設定は、見たように「宇治拾遺」三九の「筑

紫の人、商ひしに新羅に渡りけるが」というそれを変奏したものが、その前提には交易を中心とする三国間交流の活発な歴史的状況があつた。とくに八二二年に港市が設けられた明州（のち寧波）は、宋・元期以降、高麗・日本・福建・広南などを結ぶ中継地として栄え、日本の筑紫（博多・箱崎など）とは、中世の東アジア海域における日中間交流の拠点となつた。また、それらが新羅を経由して結ばれる航路も、新羅海商が広範な活動を展開した九世紀末には整つていた可能性が指摘される。「宇治拾遺」と「虎物語」の航路を繋ぐと、件の三国間航路が描かれることになるのは、見逃せない。ちなみに、明州は日本の遣唐使とも関係する。遣唐使後期の南路航行時代、入港地としては揚州をはじめ越州・福州などが知られるが、天平宝字や延暦などの時は明州にも入港していた。その「明州の津」から「遣唐使」が登場する第三話への連想は辿りやすかつたことだろう。

そのような東アジア海域の交流史を踏まえた「虎物語」の設定変奏の中で、明州商人が「慶州」に赴いたとするのは、入港先ではないものの、やや違和感があるうか。最近、慶州に近い「蔚山伴陞洞」から、古代より近世に至る港湾施設が発見され、そこで「日本列島との通好」が「慶州の発展」「新羅の繁栄」に関わつていたと指摘されるが、こと中国・明州からの朝鮮半島への寄港地としては、やはり西海岸がふさわしく、例えば高麗時代に外国商人が利用した貿易港として「礼成江」などの首都開城に近い外港が知られる。また、慶州や蔚山と同じ慶尚道なら、やはり南海岸の「新羅の金海」（「宇治拾遺」一五五）の方が有力であろう。それを商用先にしろ「慶州」とするのは、一見、都城をそこに置いた「新羅国」を喚起する

ためのようだが、はたしてどうか。「唐、明州の津に商人あり。慶州といふ所に商いに至るとて」という第二話の冒頭には、異国どころか他国に赴いた雰囲気もない。先述したように、上記の「新羅の金海」も第四話では「朝鮮国」の「ねき」に改められる。その結果、『虎物語』に「新羅」の国名が消えてしまっただけで、それは同じく統一国家を象徴する「唐」が多用されるのとは大きな違いである。そこには、対等ではない中国と朝鮮の、おそらくは服属支配の関係を内実とするような一体的認識が横たわると思われる。そのことと、『虎物語』が中国をして日本的武勇を称賛せしめる変奏を行ったこととは、矛盾しない。

三、第三話／唐の皇帝による遣唐使絶賛

「解題」に「③「遣唐使の子虎に食わるる事」は、遣唐使として中国に遣わされた日本人が子を虎にさらわれてしまったが、虎を追いかけて退治する話。」と紹介される第三話は、元の『宇治拾遺』一五六に対して、話のあらすじこそ同じだが、叙述は対校困難な程に相違し、その上にかかなりの重要な加筆が施されている。例えば、遣唐使の十歳程の子は、『宇治拾遺』では、雪の高く降った日、外へ遊びに行つて虎に襲われたのに対して、『虎物語』には、家の中に居て夜半過ぎに山から来た虎に「首の回り」を啞えられまま連れで行かれたとある。その跡を追つた父親が虎を仕留める場面でも、『宇治拾遺』が「じつと踞っている虎の頭を太刀で切り割つたが、なお食らわんと走り寄つてきたので、その背骨を打ち砕いた」など

と詳述するのに対して、『虎物語』は「山際につゝみに追い詰めて、太刀を以て虎の頭を切り落としけり」という簡単な叙述に留まる。その反対に『宇治拾遺』にはない亡児の懇ろな埋葬・供養のことが、『虎物語』に附加されるといった違いもあるが、最も大きな相違は、次のような後日譚が『虎物語』にあることだろう。

唐の帝の上間に達し、大きに感じ給ひて宜はく、「昔、李將軍といひし人、妻の願ひを叶へんとて、虎の生き肝を取らんために、雲上龍といふ馬に乗りて、千里の野辺に出で、虎を狙ひけるが、何とかしたりけん、かへつて虎に食はれて失せにけり。

古今に名を得し猛将さへ虎に遭ふてはかくの如し。況んやそのよの人倫に於みてをや。誰かは虎に手向かひせん。然るに今、日本の人、目の当たり虎を手打ちにしたり。上古も末代も有り難き例なり」とて、遣唐使を召されて、様々にもてなし、数の宝を給はりてぞ返し給ふ。これ日本の面目とぞ聞えし。

唐の皇帝が虎を仕留めた遣唐使を絶賛しあまた褒美をして帰国させたというこれは、第三話冒頭の「いづれの帝の御時にや、唐へ勅使を立られけり。これを遣唐使といひて、三位以上の人の才覚優長なる人を選びて、遣はさる、作法なり」という、同じく独自の遣唐使の説明的叙述と首尾呼応するものである。この「日本の面目」の顛末に対して、『宇治拾遺』の結尾は大きく様相が異なっていた。

唐の人は、虎にあひて逃る事だにかたきに、かく虎をば打ち殺して、子を取り返してきたれば、唐の人は、いみじき事にいひて、「猶、日本の国には、兵のかたはならびなき国なり」とめでけれど、子死ければ、なに、かはせん。

ここでは、「唐の人」が称賛した日本国の「兵」の名譽も、愛児を失った悲しみに空しく掻き消されている。そうしたストイックな悲話を反転させるかの如く、『虎物語』は日本の武勇の称賛を中国皇帝によるそれへと強化することで、対外的国家レベルの「日本の面目」譚に書き替えたことになる。それがさらに、

婦朝して後、我が君、この由聞こしめし、「名を異国に施しけるこそ、誠に日本の喜びなれ」とて、感激甚だなのめならず。

すなはち宰相になされて、厚くもてなし給ひけり。

と、日本の天皇によるゝゝゝ厚遇を語って終わるのは、両国の「帝」による連繫の妙さえ物語るかのようだ。

例えば阿部仲麻呂、吉備真備、空海など、遣唐使の留学生や留学僧が中国で高く評価された史実・伝説は少なくないが、留意すべきは、この遣唐使が評価されたのは「武勇」であったことだ。唐帝はその評価を先掲傍線部の李將軍説話との対比によって言明した。すなわち、妻から虎の生き肝を所望された李將軍が、勇躍虎狩に出たものの、かえって虎に食われてしまった^①という話を引いて、そんな古今に名高い猛将でさえ手向かえぬ虎を、日本のこの遣唐使はたった一人で手打ちにした、その武勇を比類無きものと絶賛したのである。そこに引かれた李將軍説話は、次のような仮名本『曾我物語』巻第七（李將軍が事）のそれに拠ったと思しい。

昔、大國に、李將軍とて、たけくいさめる武勇の達者あり。一人の子のなき事、天にいのる、あわれみにや、妻女懐妊す。

將軍よろこぶ所に、女房いふやう「いきたる虎の肝こそねがひなれ」。將軍、やすき事とて、おほくの兵をひきつれ、野辺に

いでて、虎をかりけるに、かへつて、將軍、虎にくはれてうせぬ。のりたりける雲上龍、鞍の上むなしくしてかへりぬ。女房あやしみて、「將軍、虎にくわられるや」ととへば、龍、涙をながし、膝をおり、なけ共かなはず。……

本文は十行古活字本（日本古典文学大系、振り仮名が原文）を引いたが、太山寺本なども大同小異の右の説話が典拠であることは、妻の望んだ「いきたる虎の肝」や將軍が乗った愛馬の名「雲上龍」が合致する点に明らかだろう。このあと仮名本『曾我物語』には、當時胎内において、のち出生した將軍の子「かふりよく」が、父の敵を取るべく、七歳の時、雲上龍に乗って千里の野辺に出て、虎と違って射たところ、矢が刺さっていたのは若むした石であったが、さうな一念をもつて、のちついに父の敵である虎を射た^②。という話が展開される。石に矢が刺さる「没石」（『塵袋』第六46、東洋文庫）などと呼ばれる故事である。それを前漢の武將李広の事蹟とするのは、『史記』列伝や『漢書』列伝に遡る。しかし、そこには復讐譚となる要素の父の虎害死が見えない。それは『蒙求』「李広成蹊」の末尾に「広父為虎所死、広猿臂射、見草中石以為席、遂射之没羽、更射之、終不能没石也」と記す古註に由来したようだ。これを、日本では『注好選』上70や『今昔物語集』巻17などが、母を害した虎を狙った李広の話として、真名本『曾我物語』巻第四は同じく母を害した虎を射る話を「胡の深王」（東洋文庫）のそれとして伝える。それらに対して、通例は李広を指す「李將軍」の遺児による復讐譚として載せるのが、仮名本『曾我物語』であった。

それに拠った『虎物語』で見ると、李將軍が虎に食われた前

半だけを切り取り、それを唐帝に語らせたことだろう。仮名本『曾我物語』によれば、妻はこの時に待望の児を宿すことができた。そのため虎の生き肝を求めたのだが、『虎物語』は懷妊のことに触れない。その分、虎肝所望の理由がわかりにくい反面、胎児の存在も出生後の父の敵討も、問い質されることはない。巧みな表現操作と言うべきだが、それでも、該話の日本における伝承状況からすれば、本来それが敵討へと展開することは自明であつたろう。それは、第三話の遣唐使の虎退治が報復であつたことも共鳴する。その点で、典拠が仮名本『曾我物語』であつた意味は大きい。そこにおいて件の復讐譚を弟の五郎時致が語るののは、自分たちを「寒苦鳥」に喩えて仇討に気弱な様子を見せた兄の十郎祐成を鼓舞するためであつた。すなわち、『虎物語』第三話は李將軍説話を伸立ちにして、曾我兄弟の仇討までも手練り寄せていると見てよいだろう。日本の遣唐使の虎退治が、「武勇の達者」の中国將軍の虎狩失敗との対比にて絶賛され、その類稀な武名が、「日本の大將軍」（仮名本『曾我物語』巻第十）頼朝に称賛される曾我兄弟の仇討のそれに重ねられる。そうした連関のもと、日本的武勇の顕彰がなされたと思われる。

四、第四話／朝鮮に逃亡した日本武士

第二話において「新羅」自体の存在を消すかのようにあつた『虎物語』は、第四話では新羅に替えて「朝鮮国」を虎退治の舞台として前面に押し出す。この一種の食い違いは、第四話が朝鮮王朝時代の日朝交流史を踏まえて、最も積極的に改作されたために生じたも

のと考えられる。抑も、『宇治拾遺』の一五五と一五六の順序を入れ替え、一五五に基づく該話を掉尾に配し、そこに計五図のうち三つもの絵を描き入れるのは、そうした意識の高さを物語つていよう。「解題」には、絵の図柄を含む説明が次のようになされる。

④「うちひさ虎を射る事」は、朝鮮に渡つた日本人が、虎に悩まされている人々を救うべくこれと一騎打ちし、見事にしとめる話。この中で、虎退治を申し出るうちひさの様子と、虎を射るうちひさの様子、仕留められた虎を検分する人々の様子の三図の絵が挿入される。

このほか「解題」には、先掲の全体構成に関する説明のあとに、「なお、「うちひさ虎を射る事」は、宇治拾遺では主人公を「宗行の郎党」としているが、本資料では、「ながとのくにのうちひさ」としている。」という改変の具体も指摘されていたが、第二話と同様、確かに第四話にも地名・人名に重大な異同が認められる。

又、長門の国、うちひさといふ兵ありけり。身にあって、大敵を持ちけるが、彼れ一類広くして、こ、かしこ付き回りて狙ふ程に、身の置き所なくして、ひそかに小船に取り乗り、朝鮮国へぞ逃げ行きける。彼の国、ねきといふ所あり。その所に至りぬれば、諸人いみじう騒ぎの、しる程に、何事の起きてかくひしめくやらんと怪しくて、かたへの人に遭ふて、これを尋ね問ひければ、「この頃、虎の山よりこの里へ夜なく来たてりて、人をとりて食らふ故に、かくの如く用心をするなり」と語る。

これが『虎物語』第四話の冒頭部である。このうちの傍線部が、次の「宇治拾遺」一五五の冒頭部にある「老岐守宗行が郎等」「新

羅国「金海」をそれぞれ改変したものとわかる。

今は昔、壹岐守宗行が郎等を、はかなきことによりて、主の殺さんとしければ、小舟に乗りて逃げて新羅国へわたりて、隠れてあたりける程に、新羅の金海といふ所のいみじうの、しり騒ぐ。「何事ぞ」と問へば、「虎の国府に入て、人をくらふ也」といふ。……

では、「虎物語」の「長門の国」の「うちひさ」とは誰か、「朝鮮国」にある「ねき」とはどこか、ともども明らかにすべきだが、その確定は容易ではない。「うちひさ」は「氏久」だろうが、長門国の武将としては、大内氏家臣で文明三年（一四七二）正月に吉見信頼と長門国地福（現、山口市）で戦って死んだという末武氏久が確認される程度である（『萩藩閩閩録』等）。「ねき」については「ねき」と読んで、日本では「とくねぎ・とうねぎ」と呼ばれた「東萊」という慶尚道の地方府を指すと考えたい。なお、「ねき」はもう一度、氏久が虎を射殺して帰る場面に、「その矢をも抜かずして、とくねきに帰りて」と表現される。あるいは「疾くねぎ」と「東萊」を掛けたものかもしれない。ともあれ、そうした同定・比定の手懸かりも、該話が背景とする日朝交流史の実際に求めるほかないだろう。

まずは元の『宇治拾遺』一五五に影響を与えた事例を見てみたい。それは『吾妻鏡』元暦二年（一一八五）六月十四日条などに記される。平家の追討を受けて高麗国に逃げた対馬守藤原親光に関するもので、その対馬から高麗への逃亡は、薩摩平氏阿多忠景の鬼界島、平泉藤原泰衡の蝦夷島、越後城助職の佐渡への逃亡（企て）例とともに、「十二世紀後半期に境界領域を支配した者が、圧迫を被った

ときに見える行動パターン」と位置づけられている。それは当然、逃亡先との活発な交通・交易を前提としたが、高麗・朝鮮はその条件の最も整ったアジュールであったろう。『宇治拾遺』一五五では、新羅に逃亡するのは壹岐守宗行の郎等で、その原因も主従間の争いである点で、支配者の逃亡とは言い難いけれど、壹岐もまた西の境界領域であること、逃亡先の金海が日本との交流拠点であったことは、該話も右の類型を踏襲する証左と見ることができ。ことに金海府（金州）は、十世紀後半以降の漂流民返還などに関わる「対日本外交の最前線」であり、一二二七年高麗の全羅州道按察使が大宰府に倭寇禁圧を求めた際によれば、かつて対馬との交易等で「日本人接待のための館舎」が設営されていたという。

その金海に替えて『虎物語』第四話が設定した朝鮮国の「東萊」は、「朝鮮初め三浦の一つ、富山浦を置き倭館を設け、日本人が居住して交易した。」（岩波文庫『高麗史日本伝（上）』（世家一八四））などと説明されるように、同じく日朝交流の拠点であったが、近世期にかけては、むしろ豊臣秀吉による第一次朝鮮侵略（文禄の役）壬辰倭乱）の最初の戦場であったイメージが強いのではないか。一五九二年四月十二日、釜山に侵攻した小西行長・宗義智らの第一軍は翌十三日に釜山城を攻め落とし、十四日には東萊城を陥れた。例えば小瀬甫庵著『太閤記』卷十三（一六三七年三月以前刊）には、「さる程に小西摂津守は、惣軍勢に先立事莫大にして、釜山海、とくねぎ、西城を攻落し、振猛威事甚以夥し。」（寛永無刊記本、新日本古典文学大系）とある。そのような記憶は、氏久の虎退治から、秀吉の命で朝鮮出兵の諸大名らが行った虎狩への連想にも導かれ易いこ

とだろ。その後、東萊城は「倭城」となり、主に毛利秀元・同家臣吉川広家が在番した。また、周知の通り、毛利氏は十六世紀中頃に大内氏を倒し「長門の国」を領有した。そのことに関連づけるのなら、毛利氏に滅ぼされた出雲の尼子氏久なども、「氏久」のモデル候補に挙げることができる。

尼子氏久は、新宮党二代目当主で天文二十三年（一五五四）に従兄弟の晴久に殺された誠久の子とされるが、抑も実在したかどうか疑わしい。誠久の男で知られるのは、父と祖父国久が殺された時、京都に逃れて、のち山中鹿介らに擁立され、一時は出雲に復活を果たした勝久である。彼は天正六年（一五七八）毛利氏に攻められ播磨国上月城で大将として自害するが、香川正矩（一六六〇年十月没）の著した毛利氏を中心とする軍記『陰徳記』には、勝久自害のあと「助四郎氏久、サスガ大将ノ御自害程候トテ続テ腹ヲ切レケル。イト潔ク見ヘニケル。」（巻之第五十六「上月之城没落之事」。マツノ書店、一九九六）と、「従子」氏久もこの時切腹したと語られる（宣阿著『陰徳太平記』も同）。甥かどうかはともかく、ここではまるで勝久の分身のような氏久である。先掲の第四話冒頭部によれば、「氏久」の相手は「大敵」で、その一類に広く追尾され「身の置き所」もなかった。中国制覇を果たした毛利氏は大敵と呼ぶにふさわしい。長門出身ではないが、毛利氏により敗死した伝説の武将尼子氏久が、実は生き延びて長門から密かに朝鮮に渡り再興を図ろうとした、という『虎物語』による発展的構想はどうであろうか。

そうした朝鮮逃亡劇の先蹤として注目されるのが、嘉吉の乱で追伐された赤松満祐の弟則繁のそれである。万里小路時房の『建内記』

嘉吉三年（一四四三）六月二十三日条（大日本古記録）に記された「高麗国朝貢使」の訴えによれば、前々年の乱で播磨国を没落した「赤松左馬助」（「謀反人也」と注記）則繁は、その後行き方知れずであったが、筑紫の菊池氏（実際は少貳頼頼か）を憑んで高麗国に渡り、一ヶ国を討ち取って難儀に及んでいるという。倭寇と化したのである。この伝聞に拠ってか、さらに『嘉吉物語』（成立時期等不明、統群書類従）には、高麗国で「清水の將軍」と仰がれた則繁だが、甥の則尚をもち立て再起せんと帰国、最後は追討されて「河内国太子」で自害したと語られる。真偽の程はともかく、その高麗での英雄譚は、先の対馬守親光が、彼の郎従の猛虎退治に感じた高麗の「国主」（国王明宗か）から三ヶ国を与えられ、帰国の際は宝物を三艘の船に載せて送られたというのと同様、日本的武勇の優越を抜きなく物語る。『虎物語』第四話もまさしくその系譜に連なるが、ここでの氏久は、親光や則繁と違って、再び日本に戻る事がなかった。高麗・朝鮮への新たな逃亡劇と言うべき、その結末を物語る第四話の末尾は、次の通りである。

この由、国司聞こしめして、「かゝるゆゑ、しき兵は国の大きな宝なり。この国の守りとすべし」と宣ひて、かのうちひさを召されて、国を与へ位を授け召し使はせ給ひけり。この故にや、四夷乱れをなさず、時つ風静かにして、万民ともに豊かに栄へけり。うちひさも代々、君の寵臣として、家門広がりはひかつく。子孫、今に穩やか也。これ併り弓矢の名譽なり。めでたかりける事なるべし。

国司から虎退治により国の大きな宝と称された氏久は、領国と地

位を与えられ寵用されたが、そのため国は乱れることなく静かで万民みな豊かに栄えた、といい、氏久も代々国王の寵臣となり家門広がり子孫も今に安穩である、という。一方の『宇治拾遺』一五五では、猛虎を退治してくれた郎等を、金海の人々は惜しみ留めて大切にしてくれたが、彼は妻子を恋うて筑紫に帰り、主の宗行に報告したところ、「日本のおもておこし」であると勘当も赦され、賜つた禄を主にも取らせた。最後の「多くの商人ども、新羅の人のいふを聞て語りければ、筑紫にもこの国の人の兵はいみじきものにぞしけるとか。」は、明らかに『宇治拾遺』三九との連繋を意識したもので、郎等の猛虎退治の事実性と称賛評価の両国共有化を強調する結びになっている。これを書き替えた『虎物語』で注意したいのは、虎退治によって家門再興の夢が叶っただけでなく、氏久の寵用がほとんど国家レベルの安寧と繁栄までもたらしたとされることだ。それがすべて「弓矢の名誉」として語られる点も見逃せない。

朝鮮国の英雄となった氏久は、日本的武勇の勝利を象徴しているが、そのことは、「東萊」や「虎」をめぐる記憶を介して、秀吉の朝鮮侵略との寓意的関係をとりに結ぶのではないか。すなわち、氏久における朝鮮への帰化と家門隆盛は、秀吉にとつての朝鮮の征服と日本支配を喚起する仕組みにあると観察される。

天正十九年（一五九一）八月頃より、秀吉は翌年の明国出兵を広く催促し準備を命じているが、そのうちの例えば島津久通編『征韓録』（寛文十一年（一六七一）序・跋）の巻頭に引かれる「天正十九年九月下旬」の「御朱印」には、次のような文言が見える。

縦朝鮮国幕下に属せずと雖も、斯の時争本朝に対して干戈

を戦はしめんや。更に漢土は文書を専にして世を保つ。和国は弓箭を以て国を治む。夫吾が朝は小国為りと雖も、知恵国と為す。今又、秀吉威名を抽んづるを以て、武勇第一之国と号せんこと必然なり。³⁰⁾

朱印状としての信憑性はともかくも、右の「和国は弓箭を以て国を治」め、今や秀吉の抜きん出た威名をもって「武勇第一之国」と称して当然だという自国観は、先掲の『虎物語』第四話末尾における氏久の英雄観とみごとに重なる。秀吉の朝鮮侵略との寓意的関係を想定する所以だが、しかし、そこで相手にされるのは、あくまで「文書を専」にする中国であった。その対応関係の構築こそ、『虎物語』における改作の眼目であったと言つてよい。

おわりに

如上、『宇治拾遺物語』の虎関係説話に基づく奈良絵本『宇治拾遺虎物語』は、日本的武勇の誇示という元の主題性を継承・強化しているのを見て間違いない。それは、とくに日本人の虎退治に対する、第三話の中国皇帝の「李將軍」と対比しての絶賛、第四話の朝鮮での「国の宝・国の守り」としての評価などの積極的な加筆部分に端的に窺える。その営為は、『宇治拾遺』についての解釈的理解を追求するものとして、また、その受容的解釈を再現するものとして興味深い。さらに第三話では日本の天皇による叙感と厚遇、第四話では日本武士の朝鮮への帰化、国王の寵臣としての家門繁栄・子孫安穩までも潤色するところには、もはや享受的再編のレベルを超え

た『虎物語』の再創造的な改作への意志が認められる。

そうした改作意志は、より強く中国を意識したところに始まるようだ。何より巻頭第一話に中国をメッカとする「龍虎の争い」を描いたことが大きい。逆に第二話で「新羅」を消去したように、『宇治拾遺』の虎関係説話に見出せた中国と朝鮮の一体的な捉え方は、もはや服属関係を内実とするようなものに変容している。その第二話の「慶州」における虎と鱈の格闘を、「筑紫」ではなく「明州」の商人が目撃するという設定に改めることで、中国に朝鮮猛虎の脅威を実感させるかたちをとり、それによつて、第三話の遣唐使による虎退治だけでなく、第四話の長門から朝鮮に逃れた兵の虎退治に誇示される日本の武勇をも、中国に認知させるといふ構成的展開を企てたのが、『虎物語』であったと考えられる。

かくして『宇治拾遺』の「虎」をめぐる主題的世界を、中国に照準を合わせて語り直した『虎物語』だが、そこに横たわる中国観は、奈良絵本としての制作時期とも関わって、第四話にひそむ秀吉の朝鮮侵略との関連が鍵になってくるだろう。秀吉のそれは「唐人」と称されたように、朝鮮を通路として大明国を制覇せんとする無謀な企てに係る中国観であった。『虎物語』がはたして秀吉の二の舞を演じているのかどうか、さらなる検証を期したい。

【注】

(1) 山口眞琴「(からくにの虎)をめぐる朝鮮・中国観について」『東アジアの今昔物語集―翻訳・変成・予言』勉誠出版、二〇二二・七。

(2) 同目録の「解題」には、併せて冒頭第一紙と計五枚の絵が関連する解説・翻字を附して載せられている。当該絵巻は、そのほか『明治古典会七夕古書人礼会目録 平成22年』(明治古典会、二〇一〇・七)の「古典籍」項に、1888「虎物語 奈良絵本 寛文・延宝頃写 33×1090 一巻」として、冒頭第一紙と最初の絵が掲載されている。

(3) 主たる理由は、『宇治拾遺物語』原話に対して、『虎物語』の加筆による本文異同の度合いが大きく、また重要な人名・地名等の意図的改変による相違が改作レベルにあることである。

(4) 小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』(若草書房、一九九九) 12「宇治拾遺物語絵巻をめぐる」(初出一九九三)、同「宇治拾遺物語絵巻をめぐる」(陽明文庫蔵 重要美術品 宇治拾遺物語絵巻) 勉誠出版、二〇〇八。

(5) 『宇治拾遺』の虎関係説話のうち一五五は、国会図書館蔵「今昔物語絵巻」絵本一冊(近世後期。白描、一部に淡彩)に、絵のみ全十一例ある一つとして収められる。

(6) 石川透『奈良絵本・絵巻の展開』(三弥井書店、二〇〇九) 第三編・第二章「奈良絵本・絵巻の筆跡と制作時期」(初出二〇〇五)。

(7) 新釈漢文大系の訓読文に拠る。『謡曲叢書』第三巻(博文館、一九一五)や『謡曲大観』第五巻(明治書院、一九三二)の頭注指摘。前者は「文選」卷四十七・王褒「聖主得賢臣」頌の「故世必有聖智之君、而後有賢明之臣。虎嘯而谷風冽、龍興而致雲氣」(新釈漢文大系)、後者は「周易正義」卷一の「龍吟

則景雲出……虎嘯則谷風生」(欽定四庫全書)の例も挙げる。

(8) 信多純一「『国性爺合戦』の龍虎」(大阪大学『語文』49、一九八七・九)。

(9) 『下学集三種 東京大学国語研究室資料叢書14』(汲古書院、一九八八)。

(10) 「虎骨」そのものは、唐・高宗時代の最古の勅撰本草で知られる『新修本草』(六五九年、蘇敬撰)に搭載されるが、その注記に虎眼の故実伝承は見えない。

(11) 『陳藏器本草拾遺不分卷』国会図書館蔵「特1-481」(2)、江戸期写本(デジタルコレクション)に拠る。

(12) 『虎物語』では明州を「みやうしう」と表記する。著名な阿部仲麻呂の「あまの原」歌を入れる『古今和歌集』鞆旅歌・四〇六の左注にあるように、古くは「めいしう」だが、それが謡曲「唐船」の「明州」(刊本)などと一致するのも、『虎物語』の制作時期との関係で注意されてよい。

(13) 保立道久「物語の中世―神話・説話・民話の歴史学」(東京大学出版会、一九九八)第六章「虎・鬼ヶ島と日本海海域史」(初出一九九三)。

(14) 村井章介『アジアのなかの中世日本』(校倉書房、一九八八)、関周一「中世日朝海域史の研究」(吉川弘文館、二〇〇二)、榎本渉『東アジア海域と日中交流―九〜一四世紀―』(吉川弘文館、二〇〇七)、高橋公明「テキストのなかの明州」(『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―』国際日本文化研究センター、二〇一二・三)など参照。

(15) 注(14)の榎本著書第一部・第一章「明州市舶司と東シナ海海域」(初出二〇〇一)。

(16) 古瀬奈津子「遣唐使の見た中国」(吉川弘文館、二〇〇三)「揚州にて」。

(17) 李成市「慶州と日本列島の交通」(『アジア研ワールド・トレンド』236、二〇一五・六)。

(18) 山内晋次「奈良平安期の日本とアジア」(吉川弘文館、二〇〇三) 第二部・第三章「東アジア・東南アジア海域における海商と国家」(初出一九九六、一九九八)参照。

(19) 国立故宮博物院蔵上巻古鈔本(池田利夫編『蒙求古註集成上巻』汲古書院、一九八八)に拠る(訓点等は略)。古註蒙求については、新釈漢文大系『蒙求 上』(明治書院、一九七三)所収の早川光三郎「序説」参照。なお、李広復讐譚については、つとに村上美登志「曾我物語」と傍系故事説話―「李將軍」許白・程嬰」「玄宗・楊貴妃」説話をめぐる―」(『立命館文学』552、一九九八・二)に詳しい考察がある。

(20) 曾我兄弟の武名については、真名本『曾我物語』巻第十に「天竺・震旦より日本秋津嶋に至て、合戦はその数多けれども、武芸を天下に施して名譽を後代に留むる事は、曾我十郎助成、弟の五郎時宗にて留めたり。」とあり、仮名本『曾我物語』巻第十には、頼朝の涙ながらの言葉として「餘の侍、千万人よりも、かやうの者をこそ、一人なりともめしつかひたけれ。無愆の者の心やな。おしき武士かな」とある。

(21) 関係記事は、『玉葉』文治二年(一一八六)二月二十四日条、

『吾妻鏡』元暦二年(一一八五)三月十三日条、五月二十三日条、六月十四日条(対馬守親光の郎従による虎退治譚を含む)、文治二年五月二日条。このうち、九条兼実「玉葉」に記載があることから、虎退治や高麗国王による厚遇はともかくも、親光の高麗逃亡の事実はあったものとされる。

(22) 柳原敏昭「中世日本の周縁と東アジア」(吉川弘文館、二〇一一) 第四部・第一章「中世日本の北と南」(初出二〇〇四)。そのほか、関周一「中世の日朝交流と境界意識」(『交通史研究』67、二〇〇八・一二)、柳原敏昭「境界への逃亡」(『古代中世の境界意識と文化交流』勉誠出版、二〇一一・五) 参照。

(23) 注(18)の山内著書第一部・第三章「朝鮮半島漂流民の送還をめぐる」(初出一九九〇)。

(24) 近藤剛「嘉祿・安貞期(高麗高宗代)の日本・高麗交渉について」(『朝鮮学報』207、二〇〇八・四)。

(25) 鳥津家を対象とした虎狩伝承の問題については、山口眞琴「鳥津家朝鮮虎狩伝承の光と影——〈虎退治〉から〈虎狩〉へ——」(『兵庫教育大学研究紀要』49、二〇一六・九)に考察した。

(26) 村井章介「日本中世の異文化接触」(東京大学出版会、二〇一三) Ⅲ・3「倭城」をめぐる交流と葛藤「朝鮮史料から見る」(初出二〇〇七、二〇〇九)。ちなみに、香川正矩著「陰徳記」巻之第七十八「高麗城番之事付秀元朝臣并金吾殿事」には、「去程二日本ノ諸將釜山海近辺ノ所々ニ城ヲ築キ被籠置」、釜山海ノ東ノ方セツガイノ城ニハ加藤主計頭、占城茶碗之城ニハ黒田甲斐守、トクネンギノ城ニハ吉川侍従、カドカイノ城ニハ立花

左近、釜山海ノ城ニハ毛利太夫秀元、竹嶋ノ城ニハ龍造寺、南高麗カラ嶋之城ニハ福嶋左衛門太夫、順天ノ城ニハ嶋津兵庫頭、其次ノ城ニハ小西撰津守等也。」とある。

(27) 同じく十六世紀後半、石見国美濃郡の馬ノ谷(高嶽)城主であった杉森氏久は、毛利氏に反旗を示して徹底抗戦したが、追いつまれて戦死、杉森氏の滅亡を招いたという。『石陽軍見聞記』(安政四年(一八五七))に詳しい由だが、未見。『益田市誌(上巻)』(益田市誌編纂委員会、一九七五) 参照。

(28) 高橋公明「東アジアと中世文学」(『岩波講座日本文学史第5巻 一三・一四世紀の文学』岩波書店、一九九五・一一)、注(22)の関論文。高橋論文は、『嘉吉物語』について「自分の持つ能力を活かして「清水の將軍」になることができる、という隣国観」に言及し、関論文は「逃避する場所」、「戦争の際の逃亡先」としての高麗・朝鮮観を重視する。

(29) 秦野裕介「倭寇」と海洋史観——「倭寇」は「日本人」だったのか——(『立命館大学人文科学研究紀要』81、二〇〇二・一一) 参照。

(30) 原漢文・片仮名表記。北川鐵三校注『第二期戦国史料叢書6 鳥津史料集』(人物往来社、一九六六)の訓読文に拠る。『薩藩旧記雑録後編二』所収「6」高麗国御出張之文書」と同一。

※成稿に際し、石川透氏より種々ご助言を賜った。深謝申し上げる。

(やまぐち まこと・兵庫教育大学)